たるは、皆京大坂の風俗なり、されど物の流行は、天の左遷に順ふ物ゆゑ、都浪花の女風も、おほかたは東したるなるべし、さればかんざしさす風も然らんかし、つら〳〵おもふに、びん付油といふ物、○註略世に出てのち、髪のゆひぶりもくさ〴〵あれば、むかしのすべらかしよりは、かしらも痒からんに、師宣○菱川が天和元祿あたりの畫などには、北廓の遊女すら、櫛も笄もかんざしもみえず、かしらの痒き時は、爪もてかきしや、○中略遊女などさへかんざしさゝざりしはいぶかし、さて件の書どもをよみわたして按ずるに、今の如く人みなかんざしをさす風になりしは、おほかた元文あたりよりの事とおもひしに、はたして一證をえたり、我衣、此書は、元祿以來の雜事を、古老に聞あつめたる寫本の隨筆、安永の比を盛に歷たる江戸人曳尾庵作、花簪（はなかんざし）は、元文寛保の頃、舞子など、銀の梅の枝に、銀のたんざくをつけたるをさす、ゆきゝすれば、音のするやうにこしらへたる物なり、其頃世にはやるとあり、然れば常の簪もさしたること明し、是今より百年のむかしなりけり、

〔嬉遊笑覽一下容儀〕婦人首飾、昔は首飾なし、○中略賢女心化粧○其磧作に姑六十年以前の事をれば貞享頃に當る、定規にして、むかしも今も同じやうに思はれ、嫁の髪みるに、○中略透とほる玳瑁の櫛をさして、笄の前にかんざしとやらいふ物をさゝるゝは、何の用にたつことぞ、時代ちがひ姑の目からは、辨慶が七ツ道具を、あたまにいたゞくと思はるゝは無理でなし、凡そ首筋より上ばかりに入る物廿一二品もあり、かりそめに出るにも、身拵に隙なき事思はれける、○中略笄、かんざし、つと出し、○中略あらましさへ此通りぞかし、かく有は西鶴がいひし貞享より六十年に及べり、

〔守貞漫稿十一女扮〕文化文政中、巨戸ノ處女褻服ノ圖○圖略

京坂ハ今ニ至リテモ、簪等數ケヲ插テ、髪飾最モ華也、蓋近年僅ニ不華、江戸モ文政以前ハ此圖ノ如ク兩天釵、ビラ〳〵簪、前刺、背口刺、前後差ハ（ベツカウ）櫛等ヲ插シ、紅丈長等ヲ用フ、如此飾今江戸更ニ廢テ、處女ト雖ドモ、櫛一、中刺簪一、婦ノ笄ノ所ニ用フ前差簪一ケ、銀ノ頭搔簪小形（ホソキ）ヲ用ヒ、其他ヲ插ズ、